

## 令和 6 年度 東京藝術大学 未来創造継承センター

## 芸術資源活用プロジェクト 実績報告書

※Word ファイルで提出してください。

プロジェクトの タイトル	東京藝術大学と打刃物の関係	
実施責任者 (申請代表者)	氏名	所属／学年／役職 (所属がない方は未記入)
	梶原康紀	工芸科修士 2 年
実施期間	2024 年 4 月 1 日 ～ 2025 年 3 月 31 日	
実施内容  ※申請書の「プロジェクトの概要」や「実施計画・方法」に記載した内容について、実際にどのようなことを実施したのかについて記載。 (500～600 字)	<p>・東京芸大彫刻科、工芸科、保存修復科など、木材を扱う研究室にて学内に保管されている刃物を調査し、道具鍛冶の系譜、芸大との関係を探る。 →工芸科木工芸研究室、取手校地木材造形工房、保存彫刻研究室にて実施。 寄贈または購入して保管されている道具の写真を撮影して一覧を作成。</p> <p>・次に実施者が打刃物職人の制作場所を訪ねてインタビューを行い、制作技術の記録を行う。写真や文章で記録し、レポートや論文の形式でまとめたものを発行する。場合によっては職人が制作した刃物を購入し、木材研究室にて資料として保存する。 →審査コメントを受けて基礎的な研究に焦点を絞ることに決め、過去に芸大で集中講義を行った職人や現在行われている授業を対象を絞って取材を実施した。</p> <p>論文、発行物作成。藝大内の建物を借り、学内外のアーティストや関係者を集めてシンポジウムの開催を予定している。 →取材の記録をまとめた冊子を作成。2025 年 6 月下旬にカペラガーデンの工芸学校と木工芸研究室の合同ワークショップを企画。</p>	

**実績報告**

※プロジェクトを通じてどのような成果を得ることができたのかについて具体的に記載。  
(500～600字)

※別途、プロジェクトの実施状況や成果が分かるものを画像ファイルもご提出ください。  
(必須)

大学内に保存されている伝統的木工具の現状把握と、それらの教育・研究資源としての活用のされ方に関して資料を作成し、外部に向けて発表する基盤を準備する事ができた。当初予想していたよりも保管されている手道具（特に鑿や鉋といった伝統的な木工具）が少なかったため、外部の関係者（集中講義の講師実績がある方）に取材を実施した事で過去の授業記録が残されていないことがわかった。これらの情報や工具は大学内で体系的にアーカイブ（保存・記録）されておらず、大学内の手道具の現状を初めて包括的に把握できたことは、本プロジェクトの重要な成果の一つである。これにより、現存する手道具の種類、数量、保管状況、各道具の状態と使用履歴、教育・実習における道具の使用実態、および手道具管理に関する現行の体制と課題が明確になった。

※本様式に加え、補足資料として PDF ファイルや音声データ、映像データ等の提出も可。（必須ではありません）